

鵜羽

世阿弥作

前

ワキ 官人

シテ 海人乙女

ツレ 同

後

ワキ 前に同じ

シテ 豊玉姫

地は 日向

季は 秋

「伊勢や日向の神なりと。く。誓ひはおなじかるべし。」

「抑是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても九州鵜戸の岩屋は。神代の古跡にて御座候ふ程に。此度君に御暇を申し。唯今九州に下向仕り候。」

「旅衣。猶立ち重ね行く道の。く。浦山かけてはるぐと。馴れて心を筑紫潟。鵜戸の岩屋に着きにけり。く。」

「鵜の羽ふく。今日の御祓ぞ神の小屋。立つ浪風も心せよ。」

ツレ「うどの岩屋の神の代を。」

二人「思へば久しあきつ国。」

「有りがたや過ぎし神代の跡とめて。聞けば昔に帰る浪の。」

「白木綿かけて秋風の。松にたぐへて磯の宮。鵜の羽葺くなり浜庇。久しき国の例かや。」

下歌

「実に名を聞くも久堅の。其海人乙女数々の。手向草をさゝげん。

上歌

「誰も実に。神に頼みをかけまくも。く。忝しや此御子の。御母の名を聞くも。豊玉姫のいにしへ。げに心なき我等まで。海士の刈る藻の露程も。恵みになどかあはざらん。く。

ワキ詞

「いかに是なるかたぐに申すべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「ふしぎやな是なる仮殿を見れば。鵜の羽にて葺き。今一方をば葺き残されて候ふは。何と申したる謂れにて候ふぞ。

シテ

「実にく御不審御理りにて候。鵜の羽にて葺きたる事に付きてめでたき謂れの候。委しく語つて聞かせ参らせ候ふべし。

ワキ

「あらうれしやねんごろに御物語り候へ。

シテ

「抑地神五代の御神をば。鵜の羽葺き合はせずの尊

と申し奉る。其父の御神釣針を魚に取られ。龍宮
まで尋ね行き給ひ。豊玉姫と契りをこめ。釣針に
満干の珠を添へ取りて帰り給ふ。程なく豊玉姫御
懷妊ありしかば。此磯辺に仮殿を作り。いまだ葺
きはせざるに尊生れさせ給ふにより。鵜の羽葺
き合はせずのみことゝ申し奉る。されば其誕生の
日も此秋の今日に当りたれば。嘉例にまかせて仮
殿を作り鵜の羽にて葺き候ふなり。

ワキ「謂れを聞けば有りがたや。遠きためしも今こゝに。
宮居もさぞな千早振る。

ツレ「神の御祓の政。すぐなる御代に跡垂れて。

ワキ「今日を知る神祭り。

シテ「いそげや磯の浪に鳴く。

ワキ「千鳥もおのが翅そへて。

シテ「鵜の羽重ねて。

ワキ「葺くとかや。

地

「浦風も松風も。く。ひかたやはやち浪おろし。

音を添へ声を立て。とぼそも軒も鵜の羽風。吹けや／＼疾く吹け。吹くや心にかゝるは。花のあたりの山おろし。更くるまを惜しむや。まれにあふ夜なるらん。此まれにあふ夜なるらん。面白や是とても。実に世の中の品々。いかなれば陸奥には。鳥の羽を糸にして。衣を織るとかや。いかなれば此国は。鵜の羽葺くなり神の小屋の。恵み庇のあ

ロンギ地

しかりや。世のふしを顕はすもや。神の誓なるらん。

「はや夕暮の秋の空。浪も散るなり白露の。玉をつらねて葺くとかや。

シテ

「軒の雨。古き言の葉取り添へて。手向ぞまこと真鳥住む。うなでの杜の落葉を。拾ひ上げいざや葺かうよ。

地

「拾ふ汐干のたま／＼も。折を得たりと夕暮の。

シテ「月すでに出で汐の。影ながら葺かうよ。

地「かげもしげきの八重櫛。葉色を添へて葺く程に。

シテ「重なる軒の忍草。

地「忘れたり葺きさして。

シテ「少しは残せ。

地「名を聞くも。葺き合はせずの。神の御飯屋。葺

き残せく。しかも月の夜すがら。影諸共に我も
出で。洩る影は天照らす。神代の秋の月を。いざ

やながめ明さん。

ワキ詞「鵜の羽葺き合はせずの謂れ委しく承り候ひぬ。さ
て干珠満珠の玉のありかは何くの程にて候ふぞ。

シテ詞「さん候玉のありかも有りげに候。誠は我は人間に
あらず。暇申して歸るなり。

ワキ「そも人間にあらずとは。いかなる神の現化ぞと。
袖をひかへて尋ねれば。

シテ「終にはそれと白浪の。龍の都は豊かなる。玉の女

と思ふべし。

ワキ

「龍の都は龍宮の名。又豊かなる玉の女と聞けば豊

玉姫かとよ。

シテ

「あら恥かしや白玉か。

歌

「何ぞと人の問ひし時。露と答へて消へなまし。な

まじひに顯はれて。人の見る目恥かしや。隔ては
あらじ蘆垣の。よし名を問はずと神までぞ。唯頼
めとよ頼めとよ。玉姫は我なりと。海上に立つて

失せにけり。く。(中人)

ワキ歌

「うれしきかなやいざさらば。く。此松陰に旅居

して。風もうそぶく寅の時。神の告をも待ちて見
ん。く。

後ジテ

「八歳の龍女は宝珠を捧げて変成就し。我は潮の満
干の瓊を捧げ。国の宝となすべきなり。南無や帰
命本覚真如の玉。

地

「或は不取正覚の台の玉。

シテ「または無量寿法界。円満神通の珠。

地「おのゝ様々多けれど。山海増減のみちひの珠。

実に妙なれやあら有難や。

地「干珠を海に沈むれば。く。さすや潮も干潟とな

りて。寄せ来る浪も浦風に。吹きかへされて遠干
潟。千里はさながら雪を敷いて。浜の真砂は平々
たり。

シテ「さて又満珠を汐干に置けば。

地「さて又満珠を汐干におけば。音吹きかへて沖つ風。

汐をも浪をも吹き立てゝ。平地に波瀾を立て寄せ
立て寄せ。山も入海々をも山に。成す事やすき満
干の珠。かほどに妙なる宝なれども。唯願はしき
は聖人の。直なる心の真如の玉を。授け給へや授
け給へと。願ひも深き海となつて。其まゝ浪にぞ
入りにける。

